



Title	古漢語における禅母系疑問代詞目的語の語順変化
Author(s)	松江, 崇
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 111, 25-49
Issue Date	2003-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34056
Type	departmental bulletin paper
File Information	111_PL25-49.pdf



古漢語における禪母系疑問代詞目的語の語順変化

松 江 崇

0. 目的

1. 上古中期（春秋戦国期）における状況

1.1 CH 目的語の語順

1.2 CH 目的語に関わる統語的曖昧性の回避手段

1.2.1 述語動詞目的語の場合

1.2.2 介詞目的語の場合

2. 上古後期（前漢代）における状況

2.1 CH 目的語の語順

2.2 CH 目的語に関わる統語的曖昧性の回避手段

2.2.1 述語動詞目的語の場合

2.2.2 介詞目的語の場合

3. 上古末期・中古初期（後漢末・魏晉期）における状況

3.1 CH 目的語の語順

3.2 CH 目的語に関わる統語的曖昧性の回避手段

3.2.1 述語動詞目的語の場合

3.2.2 介詞目的語の場合

4. 結論

[テキスト・翻訳]

[文献目録]

0. 目的

周知の如く、古漢語（殷代以前の原始漢語は含めない）における他動詞句の基本語順は SVO 型（S は主語、V は述語動詞、O は目的語）であり、目的語は動目構造を構成する述語動詞・介詞に後置されるのが通則である。ところが上古漢語（殷～前漢）までは、目的語が疑問代詞である場合には、述語動詞・介詞に前置され、SOV 型の語順を示すという現象が普遍的にみられる¹。

この疑問代詞目的語の前置現象については夙に多くの研究の蓄積があり、その消失過程についての言及も少なくない。王力 1958, 太田 1988, 楊伯峻・何樂士 1992 といった語法史の概説書において検討されるほか、近年には魏泉 1990, Meisterernst2001 などの本格的な研究があり、ほぼ上古後期（漢代）から中古（魏晉南北朝）にかけての時期に、疑問代詞目的語の後置例が出現し、漸次増加してゆくことが指摘される。しかしながら、これら先行研究は、概ね疑問代詞目的語の語順変化の時期について検討するに止まるものであり、なぜ当該の時期に疑問代詞目的語の語順に変化が生じたのか、といった基本的な問題に対して積極的に答えるものでない。例えばこの現象の専論である Meisterernst2001 においてさえ、肯定文における通常の語順への類推が関与している可能性があるとの蓋然的な見通しが述べられるにすぎない。

筆者は、この通常の語順への類推が働いたとするだけの説明には不足を感じる。なぜなら共時性の高い文献言語において、疑問代詞目的語の振る舞いが、疑問代詞の種類や文法的環境によって明確に異なることを解釈し得ない

¹ 但し、目的語が疑問代詞であるという条件は、目的語が述語動詞に前置される唯一の条件というわけでは決してない。例えば、楊伯峻・何樂士 1992 は、古漢語において構造助詞が用いられずに目的語が前置される句型として、①否定句において目的語が代詞である場合、②目的語が疑問代詞である場合、③西周・春秋期において代詞「是」が目的語になった場合、などを挙げる。これらの条件についてはそれぞれに検討すべき問題を多く含むが、本稿で逐一言及するゆとりはない。稿を改めて論じたい。

からである。一例を挙げれば、南北朝期の四世紀末から五世紀初頭にかけて成立したと推定される漢訳仏典《太子須大拏經》²においては、疑問代詞のうち「何」「何所」は前置されるが³、「何等」「誰」は必ず後置される。そして類似の現象が同時期の他の文献言語においても見出されるのである。よって語順変化の背景として目的語が述語動詞・介詞に後置される通常の語順への類推があったことは否定し難いにせよ、当該の疑問代詞目的語が、特定の時期に直接的にはどのような要因によって、どのような過程を経て後置されるに至ったのか、といった個々の疑問代詞についての語順変化のメカニズムが解明されるべきだと考える。そのためには、より意識的な記述方法が用いられる必要があろう。

本稿は、以上を踏まえ、上古から中古にかけて生じた疑問代詞目的語の語順変化のメカニズムの解明を目論むものである⁴。具体的には、声母に中古音

² 《太子須大拏經》(《大正藏》No.171)は、梁・僧祐撰《出三藏記集》(No.2145)では失記とするが、隋・費長房撰《歷代三寶記》(No.2034)などの記載から、法堅(すなわち聖堅)が、河南国(現在の甘肅省南部の黄河以南の地域)の江陵寺において、瘦爽の筆受により漢訳したものと一応は推定できる。但し、諸經錄の記載内容が必ずしも一致していないこともあり、以上の推定は確定的とはいえない。なお、“漢訳”とは言うものの、その内容は《六度集經》(No.152)巻二所収の〈須大拏經〉を承けており、漢訳にあたり〈須大拏經〉が参照された可能性がある。

³ 介詞「於」の目的語となった場合は後置されるが、これは通時的に有意な後置例とはみなされない(後述)。

⁴ 本稿では、そもそも上古漢語において疑問代詞が目的語となったときに何故に述語動詞・介詞に前置されるのか、という問題については論じない。この疑問代詞目的語が前置される理由については、疑問代詞が一般に文中に於いて焦点(focus)が置かれる要素であることを踏まえ共時的な観点から解釈する説(徐傑・李英哲 1993。鈴木直治 1976 も疑問代詞目的語の前置については同趣旨)、また、上古漢語以前の原始漢語が SOV 型であったとの仮説に基いて通時的な観点から解釈する説(梅祖麟 1997, Peyraube 1997 など。王力 1983 も目的語が代詞の場合には SOV 型を推定する)などの諸説がある。いずれのアプローチの場合も、否定句における代詞目的語前置現象との関係を如何に考えるということが問題となる。なお、いわゆる漢藏語族を射程に入れた研究においては、古漢語の否定句における代詞目的語前置現象に、通時的意味を見出す論者が多いことを付言しておきたい(Bodman 1980, 西田 2000 など)。

での禅母を共有する、禅母系疑問代詞の「誰」(AC*djád>MC*žwi)⁵と「孰」(AC*djəkw>MC*žjuk)を検討の対象とする(以下、これら禅母系疑問代詞を“CH”と略記する)。そしてこれらが目的語として述語動詞に前置された“CH+V”という形式においては、ある種の統語的曖昧性が生ずる点に注目し、以下のことを主張する。

① CH 目的語の語順が前置から後置へと変化する上古後期(漢代)・中古初期(魏晉期)は、まさにCHの体系が崩壊し「誰」に統一される時期に重なる。このことはCHの体系崩壊とCH目的語の語順変化とが直接的な因果関係にあることを示すものである。

② CH 目的語が動詞に後置されるようになった背景には、無論、通常の語順への類推が潜在していたことがまず挙げられる。しかしながら直接的な要因は、“CH+V”という形式における統語的曖昧性を解消しようとする欲求である。語順変化のメカニズムは以下の如く。

I. 上古中期(春秋戦国期)ではCH目的語は前置されていた。このとき“CH+V”という形式においては、統語的曖昧性——このCHが主語なのか述語動詞の目的語なのかという曖昧性——生ずることになるはずだが、主要な方言では「孰」による主語表示、「誰」による目的語表示、というCHの体系を構成する「孰」「誰」の交替による格標示が行われ、これによって統語的曖昧性が回避されていた。

II. 上古後期(漢代)至ると「孰」「誰」による格標示が崩壊しつつあったため、CH目的語のうち一部は後置へ変化しはじめた。しかし同時に、CHが主語となる場合には、その句末に「者」を付加して主語を有標化する形式が生じており、これにより典型的な二項述語の場合、“CH+V”の統語的曖昧性が軽減され、多くは前置を保っていた。

III. ところが中古初期(魏晉)に至ると、中原・洛陽地域ではこの句末に「者」を附加する形式が消失した。このため統語的曖昧性が増大し、これを回

⁵ 推定音価は李方桂 1971 の体系による。AC は上古音、MC は中古音の意。

避しようとする欲求が高まり、語順による統語構造の標示という手段が選択されるようになり、結果として CH 目的語の後置が全面的に生ずることとなった。

以下、上古中期（春秋戦国時代）から中古初期（魏晋期）に至るまで、CH 目的語の語順について詳細に記述し直し、同時に、当該の時期における“CH+V”という形式に関わる統語的曖昧性の回避手段に焦点をあてる（本稿 1. ～ 3.）。最後に、それらを踏まえて語順変化のメカニズムについての仮説を提出する（本稿 4.）。

1. 上古中期（春秋戦国期）における状況

1.1 CH 目的語の語順

《左傳》《論語》《孟子》《呂氏春秋》を資料として⁶、CH 目的語⁷の語順の状

⁶ 一般に上古の文献資料は、その正確な成立年代の特定が難しい。《呂氏春秋》は紀元前三世紀中葉の成立であることが比較的是っきりしているが、他の文献については多くの議論がある。一般的には、《論語》は、その基礎方言が魯方言であり、紀元前五世紀頃に大部分が成立したもの、《孟子》については、やはり魯方言であり、紀元前三世紀頃に成立したものと推定されている。最も議論の分かれるのは《左傳》であるが、本稿では Karlgren1926 等の議論を踏まえ、紀元前五～四世紀に成立したものとみなしておく。但し、確認しておきたいことは、かりにある文献の成立年代・地域が特定されたとしても、それはその文献の言語が、当該の時代の当該の地域のものであるということを必ずしも意味しないということである。文献に反映された言語の漢語史における位置については、結局のところ、他の文献言語との相対的な関係に基づいて推定していくより他にないと考ええる。

⁷ 本稿では、述語動詞・介詞に前置された当該の CH が目的語であるのか主語であるのかを判別する場合、原則として意味役割に基づき、さらに種々の文法的条件を勘案した。例えば、CH が述語動詞に前置され、当該の述語動詞が当該の文型において動作主（agent）を主語にとり、被動者（patient）を目的語にとるような動詞である場合、原則として、前置された CH が動作主であれば主語、被動者であれば目的語とみなした。但

【表 I】CH=O の場合

	CH+V【前置】		CH+P【前置】		V+CH【後置】		P+CH【後置】	
	孰	誰	孰	誰	孰	誰	孰	誰
《左傳》	0	16	0	1	0	0	0	0
《論語》	0	7	2	1	0	0	0	0
《孟子》	0	3	0	3	0	0	0	0
《呂氏春秋》	0	2	0	1	0	1	0	0

- * CH は禅母系疑問代詞, V は述語動詞, P は介詞を指す。但し V は形容詞も含むものとする。
- * 判断動詞としての「為」、介詞「於」「于」の目的語は上古・中古を通じて前置されない。これらは上古における前置現象自体の“例外”と考え、上表からは除外する（後述）。
- * 介詞句が他の述語動詞句を修飾することなく、述語として用いられている場合、当該の介詞を述語動詞とみなす。
- * すべての文献における《詩經》《尚書》などの上古初期漢語からの引用部分、また《左傳》における經文の部分は除外する。
- * 《左傳》における“將以誰任”（宣公十三年），“將以誰罪”（昭公十八年）などの“將以誰 V”における「誰」を介詞「以」の目的語とみなせば、後置例が 2 例となる。本稿では直後の述語動詞の目的語とみなす。

況を【表 I】として示す。

【表 I】から CH 目的語は、原則として述語動詞（例文（1-1）～（1-7））・介詞（例文（1-8）～（1-12））に前置されることが確認される。述語動詞が三項述語の場合（例文（1-6））、助動詞を伴った場合（例文（1-7））も前置される。

（1-1） 伍參言於王曰：“晉之從政者新，未能行令。其佐先穀，剛愎不仁，未肯用命。其三帥者，專行不獲。聽而無上，眾誰適從。此行也，晉師必敗。…”（《左傳》宣公十二年）

し、これは、主観を免れない不完全な方法である。加えて、例えば述語動詞が能格動詞（意味役割の観点から、他動詞用法のときの目的語が、自動詞用法のときの主語に相当するとみなされる動詞とする）の場合には、単純な“CH+V”という形式において前置された CH が、他動詞用法の目的語なのか自動詞用法の主語なのかを判別する手段がほとんどない、という問題が生ずる。本稿では、判別する手がかりが全く得られない場合には用例数に含めないこととした。よって【表 I】以下、すべての表における用例数は筆者の主観を経た一つの目安にすぎないものである。

(1-2) 叔孫曰：“諸侯之會，社稷也。我以貨免，魯必受師。是禍之也。…衛而惡之，吾又甚焉。雖怨季孫，魯國何罪。叔出季處，有自來矣。吾又誰怨。…”（《左傳》昭公元年）

(1-3) 病間曰：“久矣哉，由之行詐也。無臣而爲有臣。吾誰欺。欺天乎。…”（《論語》子罕）

(1-4) 子曰：“吾之於人也，誰毀誰譽。如有所譽者，其有所試矣。…”（《論語》衛靈公）

(1-5) “鄉人長於伯兄一歲，則誰敬。”“敬兄。”（《孟子》告子章上）

(1-6) 管仲有病，桓公往問之，曰：“仲父之病矣，漬甚，國人弗諱，寡人將誰屬國。”（《呂氏春秋》貴公）

(1-7) 管仲敬諾，曰：“公誰欲相。”公曰 “鮑叔牙可乎。”（《呂氏春秋》貴公）

(1-8) 辰曰：“是我迂吾兄也，吾以國人出，君誰與處。”（《左傳》定公十年）

(1-9) 曰：“滔滔者天下皆是也，而誰以易之。且而與其從辟人之士也，豈若從辟世之士哉。”（《論語》微子）

(1-10) 曰：“…子謂薛居州，善士也。使之居於王所。在於王所者，長幼卑尊皆薛居州也，王誰與爲不善。在 王所者，長幼卑尊皆非薛居州也，王誰與爲善。一薛居州，獨如宋王何。”（《孟子》滕文公下）

(1-11) 子思居於衛，有齊寇。或曰：“寇至，盍去諸。”子思曰：“如偃去，君誰與守。”（《孟子》離婁下）

(1-12) 子韋曰：“熒惑者，天罰也。心者，宋之分野也。禍當於君。雖然，可移於宰相。”公曰：“宰相所與治國家也，而移死焉，不祥。”子韋曰：“可移於民。”公曰：“民死，寡人將誰爲君乎。寧獨死。”（《呂氏春秋》制樂）

最も時代の下る《呂氏春秋》に後置例が一例みられる。通時的に有意味な後置例は、この例だけである。いわゆる兼語句の兼語であることが注目される。《左傳》《論語》《孟子》には、CH が兼語句の兼語となった例は見当たらないが、同じく上古中期の《莊子》などでは前置されている。

(1-13) 民又誦之曰：“…我有子弟，而子產誨之。子產若死，其使誰嗣之。”

(《呂氏春秋》樂成)

cf. (1-14) “既使我與若辯矣，若勝我，我不若勝，若果是也，我果非也邪。我勝若，若不吾勝，我果是也，而果非也邪。其或是也，其或非也邪。其俱是也，其俱非也邪。我與若不能相知也，則人固受其黷闇，吾誰使正之。…” (《莊子》齊物論)

なお、判断動詞（同動詞）としての「為」も前置されていないが、これは多くの先行研究が指摘するように、すべての上古文献において原則的に前置されないので、疑問代詞目的語の前置現象自体の“例外”と考え、通時的に有意義な後置の例とはみなさない⁸。

(1-15) 長沮桀溺耦而耕。孔子過之。使子路問津焉。長沮曰：“夫執輿者爲誰。” (《論語》微子)

1.2 CH 目的語に関わる統語的曖昧性の回避手段

1.2.1 述語動詞目的語の場合⁹

CH 目的語が述語動詞に前置されるということは、主語の省略があった場合——古漢語ではこのような省略が極めて頻繁に生ずる——理論的にはCHが主語となった“S+V”と同形式になってしまうということである。例えば、“CH+V”がそのまま文として現れている場合はもとより(例文(1-4) (1-5))，“S+CH+V”のようにCHの前に名詞・代詞が主語として置かれている場合

⁸ 本稿で扱った四文献には偶然にその例を見ないが、判断動詞としての「為」以外に、疑問代詞が介詞「於」「于」の目的語となった場合も、古今を通じて前置されない(下例を参照)。「於」「于」が他の介詞に比して文法化の程度が高く、文法的に異なる性質を有することは、これが動目構造の間に挿入されて“V 於 O”という形式を構成し得ることなどからも看取される。

・“…盜竊之行，於誰責而可乎。” (《莊子》則陽)

⁹ 本稿1.2.1の内容は、松江〈2003〉で言及したものと重なるところが少なくない。本来は重複箇所は省略すべきであるが、本稿の論旨に直接に関わると考え、敢えて重複を避けない。

【表Ⅱ】“CH+V”における統語的曖昧性

	CH+V			
	CH=S		CH=O	
	孰(者)	誰(者)	孰	誰
《左傳》	21(0)	19(0)	0	16
《論語》	4(0)	0	0	7
《孟子》	11(0)	1(0)	0	3
《呂氏春秋》	12(1)	0	0	2

* “CH+V”を含む句であっても、CHが主語となり、Vの目的語が明示される句型をとるもの（Vが二項述語の場合は“CH(=S)+V+O”。Vが三項述語の場合は“CH(=S)+V+O+O'”）は除外する。

* 表中の“孰(者)”における“(者)”は、当該の「孰」が主語となったもののうち、句末もしくは「孰」の直後に「者」を伴う形式の用例数。すなわち()は内数。この形式については本稿2.2において言及する。

においても、下例(1-16)のごとき主述述語文“S+S+V”であるのか、或いは“S+O+V”であるのか(例文(1-1)～(1-3))の判別が、一見すると語の意味関係・文脈だけに依存しているかの如くである¹⁰。この点に注目し、CHが述語動詞の目的語となった場合の統語的曖昧性に関して、【表Ⅱ】を示す。

(1-16) 秦伯問於士鞅曰：“晉大夫其誰先亡。”（《左傳》襄公十四年）

まず【表Ⅱ】から《左傳》と他の三文献とでは、状況が大きく異なることが知られる。

《論語》《孟子》《呂氏春秋》においては、CHが「孰」であれば必ず主語であり(下例(1-17)～(1-19))、CHが「誰」であればほとんどが目的語である(例文(1-1)～(1-7))という相補的分布が看取される。ここでは、いわば「孰」「誰」の交替が、主語標示・目的語標示という格標示の機能を担っているとみ

¹⁰ 但しストレス・ポーズ等による示差的区別があったとすれば、それにより統語構造が判別されたことになる。

なされる。この格標示により、統語的曖昧性が回避されていると考える（この点は松江〈2003〉において詳述）。

(1-17) 季康子問政於孔子。孔子對曰：“政者，正也。子帥以正，孰敢不正。”（《論語》顏淵）

(1-18) “鄒人與楚人戰，則王以爲孰勝。”（《孟子》梁惠王章句上）

(1-19) 萬乘之主，人之阿之亦甚矣。而無所鏡，其殘亡無日矣。孰當可而鏡。其唯士乎。（《呂氏春秋》達鬱）

一方《左傳》では、「孰」が目的語とはならない点は確認されるが、「誰」が目的語標示という役割を担っているとはみとめられない。よって【表Ⅱ】を見る限りでは、《左傳》においては“CH+V”の統語的曖昧性が回避されていないかの如くである。ところが、実際には、“CH+V”において「誰」が主語となった場合は、Vが形容詞や自動詞の一項述語である場合が多く（例文（1-21））、「誰」が目的語の場合は、Vが他動詞¹¹の二項述語である場合が多いという傾向が見出される（例文（1-22））。よってこのような述語の種類に依存して、統語的曖昧性が一定程度は軽減されている。但しこれは傾向にすぎず、例外とみなし得る用例もみとめられるため、統語的曖昧性は少なからず残存しているはずである。筆者は、その意味で《左傳》におけるCHの体系は不安定であり、《左傳》型から《論語》《孟子》《呂氏春秋》型が生成されてゆく一因となったと推定している。

(1-20) 雍姬知之，謂其母曰 “父與夫孰親。”（《左傳》桓公十五年）

〔“孰+V”：孰=S〕

(1-21) 再拜稽首辭曰：“死在朝夕。無助天爲虐。”子產曰：“人誰不死。凶人

¹¹ 本稿では、他動詞について、目的語を要求する動詞という意味で用い、他動性（transitivity）の強弱は問題にしない。よって、例えば状態動詞や移動動詞の類でも目的語を要求するものは他動詞とする。

不終，命也。…”（《左傳》昭公二年）

〔^レ誰+Vi[〃]：誰=S〕

(1-22) 林不狃之伍曰：“走乎。”不狃曰：“誰不如。”（《左傳》哀公十一年）

〔^レ誰+Vt[〃]：誰≡O〕

1.2.2 介詞目的語の場合

CH が介詞目的語となって前置された場合，理論的には^レCH+P+V（+O）”という形式において，CH が文の主語となった場合との間で統語的曖昧性が生ずると予想される。

《論語》《孟子》《呂氏春秋》については，述語動詞のときと同様に，「孰」ならば文の主語，「誰」ならば介詞の目的語，という相補的分布に依存して統語的曖昧性が回避されていると思われる。このことは，^レ孰+P+V（+O）”の方に適切な例が見当たらないため積極的には裏付けられないが，上述の例文（1-8）～（1-12）により^レ誰+P+V（+O）”については肯定される。

但し《論語》の次例は，通説によれば「孰」は前置された介詞目的語であり，格標示の例外となる。ところがこの例文の構造の解釈に少しく疑義があること¹²，上古中期までの文献においては「孰」が目的語となるのは稀少であることを考え合わせると，積極的な反例とまではみなせないと思われる。

(1-23) 哀公問於有若曰：“年饑，用不足，如之何。”有若對曰：“盍徹乎。”曰：“二，吾猶不足，如之何其徹也。”對曰：“百姓足，君孰與不足。百姓不足，君孰與足。”（《論語》顏淵）

¹² 魏倍泉 1990：294 は，この《論語》顏淵の例文について，《鹽鐵論》末通における“君雖欲足，誰與之足乎。”の箇所を挙げ，もしこれが《論語》の当該の例文を解釈したものだとなれば，《論語》の例文における介詞「與」の目的語は「孰」でなく「君」であるかもしれないとの推測を示す。なお，この《論語》顏淵の例文については，《論語集釈》〈考異〉の指摘するように，《後漢書》楊震傳の所引の文では“百姓不足，君誰與足”と「誰」に作ることも付言しておく。

一方、《左傳》の場合、「誰」が主語を担うことが少なくないため、「誰+P+V (+O)」という文において、この「誰」が文の主語であるのか、それとも介詞の目的語であるのかが、しばしば判然としない。筆者にはこのような曖昧性が許容される理由を明確には解釈できないのであるが、介詞が機能的に共格 (comitative) に相当する「與」であることが多く、文の主語と場合と介詞目的語の場合との統語構造の違いがもたらす文意の違いがそれほど大きくはないことが関係しているであろう。

(1-24) 十三年春。叔弓圍費，弗克，敗焉。平子怒，令見費人執之以爲囚俘。冶區夫曰：“非也。若見費人，寒者衣之，飢者食之。爲之令主，而共其乏困。費來如歸，南氏亡矣。民將叛之，誰與居邑。…”（《左傳》昭公十三年）

〔誰=S (?)〕

(1-25) 子干歸，韓宣子問於叔向曰：“子干其濟乎。”對曰：“難。”宣子曰：“同惡相求，如市賈焉。何難。”對曰：“無與同好，誰與同惡。…”（《左傳》昭公十三年）

〔誰=S (?)〕

本稿では、上例 (1-24) (1-25) の「誰」をかりに主語みなし、例文 (1-24) を「誰が（南氏と）ともに（費の）まちに住むというのか」という意味に解釈するが、「誰」を介詞「與」の目的語とみなし「（南氏は）誰とともに（費の）まちに住むというのか」という意味に解釈する可能性がないとは言えない。同様に、上例 (1-25) の「誰」も、これを主語とみなして「誰が（子干と）憎しみを同じくするというのか」という意味に解釈するが、「誰」を介詞「與」の目的語と考えて「（子干は）誰と憎しみを同じくするというのか」という意味に解釈できないとは言いつれないであろう。重要な点は、いずれにしても、統語上での構造の解釈の違いが、文の意味の上では大きな違いとなつて顯れないことである。

2. 上古後期（前漢代）における状況

2.1 CH 目的語の語順

前漢に成立した《史記》のうち、秦漢以降の内容を記述した部分を資料とする。

【表Ⅲ】から、CH 目的語は、述語動詞・介詞に前置される場合と後置される場合とがあることが知られる。

CH が典型的な二項述語の目的語である場合は多く前置を保つ。なお、上古中期では助動詞がある場合、助動詞の前に置かれる傾向が強いが(例文(1-7)(2-5))、上古後期では助動詞と述語動詞の間に置かれることが多い(例文(2-3)(2-4))。

(2-1) 安國曰：「…今大王列在諸侯，悅一邪臣浮說，犯上禁，撓明法。天子以太后故，不忍致法於王。太后日夜涕泣，幸大王自改，而大王終不覺寤。有如太后宮車即晏駕，大王尚誰攀乎。」

(2-2) 吳王聞袁盎來，亦知其欲說己，笑而應曰：「我已爲東帝，尚何誰拜。」不肯見盎而留之軍中，欲劫使將。(《史記》吳王濞列伝)

(2-3) 二世曰：「何哉。夫高，故宦人也。然不爲安肆志，不危易心，絮行脩善，自使至此，以忠得進，以信守位，朕實賢之，而君疑之，何也。且朕少失先人，無所識知，不習治民，而君又老，恐與天下絕矣。朕非屬趙君，當誰任

【表Ⅲ】CH=O の場合

	CH+V【前置】		CH+P【前置】		V+CH【後置】		P+CH【後置】	
	孰	誰	孰	誰	孰	誰	孰	誰
《史記》秦漢部分	0	4	0	0	0	3	0	1

* 判断動詞としての「為」「是」、介詞「於」「于」の目的語は上表からは除外する。

* 漆権 1984 を参考に、《史記》のうち主に秦漢の内容を反映する以下の部分を資料とする。
 ・卷六〈秦始皇本紀〉～卷十二〈孝武本紀〉、各〈表〉〈書〉、卷四十八〈陳涉世家〉～卷六十〈三王世家〉、卷七十三〈白起王翦列伝〉、卷八十五〈呂不韋列伝〉～卷一百四〈田叔列伝〉、卷一百六〈吳王濞列伝〉～卷一百三十〈太史公自序〉

哉。…”（《史記》李斯列伝）

(2-4) 袁盎等入見太后，太后言欲立梁王。“梁王即終，欲誰立。”太后曰：“吾復立帝子。”（《史記》梁孝王世家：褚小孫の補伝部分¹³）

cf. (2-5) 管仲曰：“公誰欲與。”（《莊子》徐無鬼）

一方，CH 目的語が，兼語句の兼語（例文 (2-6) (2-7)），三項述語の目的語（(2-8)），介詞目的語（(2-9)）の場合は，後置されている。

(2-6) 已而呂后問：“陛下百歲後，蕭相國即死，令誰代之。”（《史記》高祖本紀）

(2-7) 於是王乃使人馳而往問泉陽令曰：“漁者幾何家。名誰爲豫且。豫且得龜，見夢於王，王故使我求之。”泉陽令乃使吏案籍視圖，水上漁者五十五家，上流之廬，名爲豫且。（《史記》龜策列伝：褚小孫の補伝部分）

(2-8) 居頃之，孝文皇帝既益明習國家事，…問：“天下一歲錢穀出入幾何。”勃又謝不知，汗出沾背，愧不能對。於是上亦問左丞相平。平曰：“有主者。”上曰：“主者謂誰。”平曰：“陛下即問決獄，責廷尉。問錢穀，責治粟內史。”（《史記》陳丞相世家）

(2-9) “…今復六國，立韓，魏，燕，趙，齊，楚之後，天下游士各歸事其主，從其親戚，反其故舊墳墓，陛下與誰取天下乎。”（《史記》留侯世家）

2.2 CH 目的語に関わる統語的曖昧性の回避手段

2.2.1 述語動詞目的語の場合

「孰」「誰」の相補的文法分布が崩壊し、「誰」が自由に主語を担い得るようになったため、「孰」「誰」の交代による統語関係の表示機能が低下している。しかし同時に，CH が主語を担う際，句末（少数は「誰」の直後）に「者」を

¹³ 褚子孫の補伝部分は，他の部分よりも時代の下る言語を反映する可能性が高く，厳密に言えば資料の同質性の面からすると問題があるが，本稿では上古後期（漢代）という枠内だとみなして区別しない。

【表Ⅳ】“CH=V”における統語的曖昧性

	CH+V			
	CH=S		CH=O	
	孰(者)	誰(者)	孰	誰
《史記》前漢部分	6(0)	5(4)	1	4

* “CH+V”を含む句であっても、CHが主語となり、Vの目的語が明示される句型をとるもの（Vが二項述語の場合は“CH(=S)+V+O”。Vが三項述語の場合は“CH(=S)+V+O+O'”は除外する。

* 表中の“誰(者)”における“(者)”は、当該の「誰」が主語となったもののうち、句末もしくは「誰」の直後に「者」を伴う形式の用例数。()は内数。

付加する形式が急増し、CHが目的語となる場合には「者」が付加されることがないため、統語関係を表示する機能を一定程度代替している¹⁴。特にCHが「誰」でVが典型的な二項述語である場合は、専ら「者」の有無により統語構造が標示されている（下例（2-10））。これにより典型的な二項述語の場合は前置を保ち得ていたと考える。

（2-10） 廷尉以貫高事辭聞。上曰：“壯士。誰知者，以私問之。”中大夫泄公曰：“臣之邑子，素知之。此固趙國立名義不侵爲然諾者也。”（《史記》張耳陳餘列伝）

【誰=S】

上古後期において注目すべきことは、例文（2-6）～（2-8）として上に示したように、CH目的語の後置例が出現していることである。但し、下例の如く《漢書》の異文では前置されるものもあるので、これらの認定は慎重にすべき

¹⁴ 宋紹年 1984 は、句末に付加され疑問詞と共起する「者」について、疑問の語気を強める語気詞であるとする。しかしそのような説では、CHが目的語となった場合には「者」が付加されない現象を説明できない。また、魏倍泉 1990 は“誰…者”という句型を機能的には（生成文法で言う）分裂句（cleft sentence）に相当するものとみなす。

であろう（この点は魏倍泉 1990 が既に指摘）。

(2-11) 呂后問曰：「陛下百歳後，蕭相國既死，誰令代之。」（《漢書》高帝紀）
cf. 例文 (2-6)

しかしながら、後置の例文 (2-6)～(2-8) は、既述のように、兼語句の兼語か、三項述語の目的語に限られていることに注目すべきである。上古中期の《呂氏春秋》における後置例（例文 (1-13)）も兼語であるため、このことを単なる偶然とはみなすことは適当ではない。統語的曖昧性という観点からすれば、CH が典型的な二項述語の目的語となった文に比べ、これらの例文においては、CH が何らかの文法関係を有している動詞が、CH 以外の複数の名詞相当句とも文法関係を有しており（或いは有する可能性を備えており）、文の階層構造が相対的に複雑であるということが指摘できよう。そうすると、上古後期の「者」の附加により統語的曖昧性を軽減する手段が、上古中期の「孰」「誰」の交替によるそれに比べて機能的に劣るため、CH 目的語に関わる統語的曖昧性が大きいものから後置されはじめた、という可能性が考えられる。上古中期における「孰」「誰」の交替による格標示は、いわば直示であるのに対して、「者」の句末への附加による格標示は間接的な標示であり、「者」のスコープがどこまでであるのかという曖昧性が関与するがゆえに、階層構造が複雑な文に関しては、統語的曖昧性を軽減させる機能が十分ではなかったのではないだろうか¹⁵。無論、以上は、現段階での見通しであり、今後、上古後期における CH 目的語の後置例について、より多くの例文を分析していく必要がある。

¹⁵ なお《史記》の秦漢部分では「誰」が文の主語を担うと、ほとんどの場合は句末に「者」が付加されるのであるが、「誰」が兼語文の主語となった下例では「者」が付加されていない。「者」のスコープの問題と考え合わせると興味深い現象であるが、本稿の調査で得られた例文はこれだけであるので、今後、上古後期における同様の用例を確認してから検討することとしたい。

・貫高獨怒罵曰：「誰令公爲之。」（《史記》張耳陳餘列伝）

2.2.2 介詞目的語の場合

既述の如く、後置の例が一例みえるだけである（例文（2-9））。これも《漢書》の異文では前置されており（例文（2-12））、どちらが当時の状況を反映したものか、俄かには判断し難い。用例があまりに稀少であるため、例文（2-9）の通時的な位置づけについては結論を保留しておきたい。

（2-12） 良曰：「今乃立六國後，唯無復立者，游士各歸事其主，從親戚，反故舊，陛下誰與取天下乎。…」」（《漢書》張良伝）cf.例文（2-9）

3. 上古末期・中古初期（後漢末・魏晉期）における状況

3.1 CH 目的語の語順

中原地方・洛陽地域の方言を反映すると推定される《阿闍世王經》（《大正藏》No.626：二世紀後半成立）《中本起經》（No.196：三世紀前半成立）《佛說義足經》（No.198：三世紀中葉成立）、及び江東地方・金陵地域の方言を反映すると推定される《六度集經》（No.152：三世紀中葉成立）を資料とする¹⁶。

【表 V】 CH=O の場合

	CH+V【前置】		CH+P【前置】		V+CH【後置】		P+CH【後置】	
	孰	誰	孰	誰	孰	誰	孰	誰
《阿闍世王經》	0	0[1]	0	0	0	1	0	0
《中本起經》	0	0	0	0	0	0	0	1
《佛說義足經》	0	0	0	0	0	1	0	1
《六度集經》	0[4]	1[1]	0	0	0	1	0	1

* 判断動詞としての「為」「是」、介詞「於」「于」の目的語は上表から除外する。

* [] 内は、「CH+有」という形式のうち、CH が存在動詞「有」の目的語ともみなし得るもの。

¹⁶ 資料とする漢訳仏典の成立年代や成立地域、反映する方言、現存の言語の真偽などに関して、《佛說義足經》《六度集經》については松江 1999 において、《阿闍世王經》《中本起經》については松江 2000 において検討を行った。なお、筆者は《佛說義足經》について、

【表 V】から、中原・洛陽地域の方言を反映する《阿闍世王經》《中本起經》《佛說義足經》では、述語動詞目的語（例文 (3-1) (3-2)）・介詞目的語（(3-3) (3-4)）となった CH は原則的に後置されることが知られる。

(3-1) 摩訶迦葉言：“如仁作意如我者，我乃受之。”王阿闍世便以衣著其上。應時而不見但聞其音。言：“其有現者，以衣與之。”便復以衣次第與諸比丘，一一不見，盡索五百人。悉亦不現，但聞其音。言：“其有現者，以衣與之。”王阿闍世熟自思念：“諸菩薩比丘僧悉亡。當以衣與誰。”（《阿闍世王經》15-402 b）¹⁷

(3-2) 勇從來去莫慚，令當誰與汝議¹⁸（《佛說義足經》4-180 a：〈偈の部分〉）

(3-3) 佛授憂陀，使作沙門，授其法戒。憂陀自念：“今爲弟子，無緣復還。王須消息。因誰報命。”（《中本起經》4-154 b）

(3-4) 道德妙與誰雙，觀尊形何時厭（《佛說義足經》4-186 a：〈偈の部分〉）

次の例は、存在句（存在する主体を目的語にとる構文とする）を構成する述語動詞（以下、「存在動詞」）の「有」が第一動詞となった兼語句であり、「誰」がその兼語として前置されたものともみなし得る。

(3-5) 時提和竭佛謂諸比丘僧：“是所受決處，不當以足蹈其地。所以者何。是則極尊神處，諸天人民一切當共事是處。誰有於是而起塔者。”應時八十億天皆念言：“我而起之。”（《阿闍世王經》15-405 a）

成立場所は江東地方だが、反映する方言は中原地方の方言であると推定している（松江 1999）。

¹⁷ 漢訳仏典の文献名の後に付した数字等は、当該の例文の《大正蔵》における位置を表す。“15-402 b”であれば《大正蔵》第十五卷 402 頁中段の意。他は類推されたい。

¹⁸ この (3-2) の例文は偈の部分であるが、筆者の力量ではこの句の前後の意味を明確に読み取ることができない。本来、かかる箇所は例文として採用すべきでないが、「誰」が目的語となった例が稀少であるため、敢えて提示しておく。

【表Ⅴ】から、三世紀の金陵方言を反映すると推定される《六度集經》においても後置例が少なからず存在することが知られる。

(3-6) 婦還睹太子獨坐，慘然怖曰：“吾兒如之，而今獨坐。… 今兒不來，又不睹處。卿以惠誰。可早相語。…”（《六度集經》3-10 a）

(3-7) 兩道士進稽首曰：“斯音絕世，將爲誰樂。”（《六度集經》3-44 c）

(3-8) 常悲菩薩仰視報曰：“當由誰聞斯尊法乎。以何方便，之何國土，厥師族名。”（《六度集經》3-43 b）

但し、次の例文はCH 目的語が前置されたものであろう。

(3-9) 菩薩伯叔自相謂曰：“吾之本土，三尊化行，人懷十善，君仁臣忠，父義子孝，夫信婦貞，比門有賢，吾等將復誰化乎。彼彼國信妖，蛟龍處之吞其黎庶，哀號無救。…”（《六度集經》3-37 a）

CH が、存在動詞の「有」が第一動詞である兼語句の兼語となり、前置されたともみなし得るものが少なくない。

(3-10) 即問長者：“內中誰有說深經者，音聲微妙乃如是耶。”（《六度集經》3-35 c）

(3-11) 王曰：“孰有能卻斯敵者乎。”（《六度集經》3-14 b）

(3-12) 王爲泣涕，誨喻之曰：“睹世皆死，孰有免之。…”（《六度集經》3-12 c）

(3-13) 王曰：“身爲朽器豈敢保哉。夫生有死，孰有常存。若子不取會爲灰土矣。”（《六度集經》3-5 b）

(3-14) 馬王臻曰：“孰有離居心懷所親。疾來赴茲，吾將濟爾。”（《六度集經》3-20 a）

3.2 CH 目的語に関わる統語的曖昧性の回避手段

3.2.1 述語動詞目的語の場合

中原・洛陽地域の方言を反映する《阿闍世王經》《中本起經》《佛說義足經》では、CH の体系において、「孰」が消失して「誰」に統一される変化が生じた。同時に、CH が主語を担った場合に付加されていた句末の「者」についても、とりわけ三世紀以降の《中本起經》《佛說義足經》では大幅に減少した。そしてCH が目的語となったときには後置の語順がとられるようになったため、“CH (誰)+V”であれば“S+V”という可能性だけが残されることになり、この形式の統語的曖昧性が回避されることとなった(【表Ⅵ】参照)。但し、以上の変化においては地域差がみられ、江東・金陵地方の方言を反映する《六度集經》では、これらの変化が中原・洛陽地域に比して遅れるようである。

なお、CH が、存在動詞の「有」を第一動詞とする兼語文の兼語となって前置されたともみなし得る例が、特に《六度集經》に少なからずみとめられるが、これらが上古漢語におけるCH 目的語の前置現象を保存したもののかについては、そもそもこれらが兼語句と分析され得るかという問題も含めて、態

【表Ⅵ】“CH+V”における統語的曖昧性

	CH+V			
	CH=S		CH=O	
	孰(者)	誰(者)	孰	誰
《阿闍世王經》	0	2(2)	0	0
《中本起經》	0	3(0)	0	0
《佛說義足經》	0	2(0)	0	0
《六度集經》	6(1)	2(1)	0	1

* “CH+V”を含む文であっても、CH が主語となり、V の目的語が明示される句型をとるもの (V が二項述語の場合は“CH (=S)+V+O”。V が三項述語の場合は“CH (=S)+V+O+O”) は除外する。

* V が存在動詞の「有」であるものは除外する。

* 表中の“誰(者)”などにおける“(者)”は、「誰」などが主語になったもののうち句末もしくは「誰」の直後に「者」を伴う形式の用例数。() は内数。

度を保留しておきたい。

3.2.2 介詞目的語の場合

CH が介詞目的語となった場合には常に後置されるので、文の主語との統語的曖昧性は生じない（例文 (3-3)～(3-4)、及び (3-7)～(3-8)）。

4. 結論

上中古間に生じた CH 目的語の語順変化のメカニズムを検討する場合、上古中期の《論語》《孟子》《呂氏春秋》型と《左傳》型とのいずれを上古後期の《史記》型の前段階として仮定すべきであるのか（或いはいずれも不適当であるのか）、ということが問題となる。現段階では積極的な判断材料は得られていないのであるが、筆者は、《論語》《孟子》《呂氏春秋》型は、《左傳》型を経て生成されたものだと考えており（松江〈2003〉）、さらに本稿で扱った四文献では、前者のうち最も時代の下る《呂氏春秋》にのみ、《史記》において大量に存在する“孰與”構文¹⁹の萌芽がみとめられることなどから、本稿では、暫定的に、上古中期の《論語》《孟子》《呂氏春秋》型から上古後期の《史記》型への変化が生じたと仮定して、CH 目的語が後置されるに至ったメカニズムを推定してみたい。

● 述語動詞目的語の場合

I. 上古中期《論語》《孟子》型

“CH+V”の統語的曖昧性の回避手段…主要には「孰」「誰」の交替

【“孰+V”→孰=S；“誰+V”→誰≡O】

¹⁹ “孰與”構文とは、下例のように“X 孰與 Y (+之) (+A)”の形式で（A は形容詞を表す）、〈X と Y とはどちらが A か〉または〈X は Y と比べてどうであるか〉といった意味を表す構文を指すこととする。

・陳平曰：“陛下精兵孰與楚。”《史記》陳丞相世家

II. 上古後期《史記》型

“CH+V”の統語的曖昧性の軽減手段…主要には「者」の附加・「孰」「誰」の交替

【“孰+V(+者)”→孰=S；“誰+V+者”→誰=S；“誰+V”→誰≒O】

III. 中古初期《中本起經》《佛說義足經》型

“CH+V”の統語的曖昧性の回避手段…語順

【“誰+V”→誰=S】“V+誰”→誰=O……CH 目的語の語順変化

なお、IIの《史記》型においても、CH 目的語の文法的環境によっては、IIIと同様の段階にある。

● 介詞目的語の場合

述語動詞目的語の場合とほぼ同じ時期に消失している。しかし本稿の検討だけからでは不明なことが多い。

I. 上古中期《論語》《孟子》型

“CH+P+V(+O)”の統語的曖昧性の回避手段…主要には「孰」「誰」の交替

【“孰+P+V(+O)”→孰=S；“誰+P+V(+O)”→誰≒O(介詞の目的語)】

但し、「孰」「誰」の交替による統語関係の標示は、述語動詞の場合よりも例外が多い。

II. 上古後期《史記》型

(今回の調査で得られた用例が稀少であるので保留)

III. 中古初期《中本起經》《佛說義足經》型

“CH+P+V(+O)”の統語的曖昧性の回避手段…語順

【“誰+P+V(+O)”→誰=S】“P+誰+V(+O)”→誰=O(介詞の目的語)……CH 目的語の語順変化

以上をまとめると、上中古間におけるCH 目的語の語順変化は、その本質を次のように整理できる。すなわち、上古漢語から中古漢語に至る際、CHの体系において「孰」が消失し「誰」に統一される傾向が生じたが、このよう

な paradigmatic な面における簡略化が“CH+V”という形式の統語的曖昧性を増大させることとなり、そして今度はその統語的曖昧性を軽減しようとする欲求が syntagmatic な面において表出された結果、上古後期における句末への「者」の付加が生じ、そしてそれが消失した中古初期に至って遂に CH 目的語の全面的な後置が促されたのだ、ということである。

最後に少し補足しておきたい。本稿では、統語的曖昧性を回避しようとする欲求が CH 目的語の語順変化に直接的に関与しているとの仮定に立ち、論を展開した。いわば演繹的な方法をも併用しているのであるが、このとき、上古中期から中古初期に至るほとんどの文献言語において、統語的曖昧性を回避ないし軽減しようとする何らかの“手段”が見出されるということは確認しておくに値するであろう。とは言え、筆者に、他の要因を積極的に排除する意図があるわけではない。例えば、後漢以降になると「何等」など、目的語となった場合、述語動詞・介詞に後置される疑問代詞が出現してくるが、これらに対する類推も少なからず関与していた可能性がある。この問題は、今後の課題としておきたい。

[テキスト・翻訳]

- ・《春秋左傳注（修訂本）》（楊伯峻，中国古典名著譯注叢書，中華書局，1981 年）
- ・《論語集釋》（程樹德，新編諸子集成・第一輯，中華書局，1990 年）
- ・《孟子注疏》（十三經注疏整理本，北京大学出版社，2000 年）
- ・《呂氏春秋注疏》（王利器，巴蜀書社，2002 年）
- ・《莊子集解》（郭慶藩，新編諸子集成・第一輯，中華書局，1997 年）
- ・《史記》（中華書局，1959 年）
- ・《漢書》（中華書局，1962 年）
- ・《大正新脩大藏經》（高楠順次郎他，大藏出版社，1924-1934 年）
 - ・第三卷・本縁部上（No.152-191）
 - ・第四卷・本縁部下（No.192-219）
 - ・第十一卷・寶積部上（No.310-320）
 - ・第十五卷・經集部二（No.585-655）
 - ・第四十九卷・史傳部一（No.2026-2039）

- ・ 第五十巻・史傳部二 (No.2040-2065)
- ・ 『阿闍世のさとり ― 仏と文殊のおしえ ―』 (定方晟, 人文書院, 1989 年)
- ・ 語彙の検索に際して, 《左傳》《論語》《孟子》《呂氏春秋》《莊子》《史記》については, <台湾中央研究院漢籍電子文獻> (<http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>) を利用させていただき, また《阿闍世王經》《中本起經》《佛說義足經》《六度集經》については, <中華電子佛典協會 (CBETA)> (<http://ccbs.ntu.edu.tw/cbeta/>) の提供するコーパス (底本は《大正新脩大藏經》) を利用させていただいた。

[文献目録]

(日文)

- ・ 太田辰夫 1988 「中古語法概説」『中国語史通考』(白帝社)
- ・ 鈴木直治 1976 「古代漢語における強調の表現について」『中国語学』223 号; 『中国古代語法の研究』(汲古書院, 1994 年)
- ・ 長尾光之 1989 「古中国語の語順変化をめぐる問題 ― 疑問代名詞を中心に」『集刊東洋学』62
- ・ 西田龍雄 2000 『東アジア諸言語の研究 I 巨大言語群 ― シナ・チベット語族の展望』(京都大学学術出版会)
- ・ 松江崇 1999 「『六度集經』『佛說義足經』における人称代詞の複数形式 ― 上中古間語法史の一側面 ―」『中国語学』246 号
- ・ 松江崇 2000 「中古初期二地域における二人称代詞」『人文学報 (東京都立大学)』311 号
- ・ 松江崇 <2003> 「上古中期漢語における「孰」「誰」による格標示」(中国語東アジア諸語研究会第 2 回例会提出レジュメ: 2003 年 3 月 22 日於青山学院大学)

(中文)

- ・ 管錫華 2000 <從《史記》看同義詞“孰”“誰”在上古的發展演變>《古漢語研究》2000 年第 2 期
- ・ 李方桂 1971 <上古音研究>《清華學報》新九卷第 1.2 期合刊; 《上古音研究》(商務印書館, 1980 年)
- ・ 梅祖麟 1997 <漢語七個類型特徵的來源>《中國境內語言暨語言學・第四輯》(中央研究院歷史語言研究所會議論文集之二)
- ・ 漆權 1984 <《史記》中的人稱代詞>《語言學論叢》12
- ・ 宋紹年 1984 <試談《史記》的幾種句法結構>《語言學論叢》12
- ・ 王海榮 1982 <先秦疑問代詞“誰”與“孰”的比較>《中國語文》1982 年第 1 期
- ・ 王力 1958 《漢語史稿・中冊》(科學出版社)
- ・ 王力 1983 《漢語語法史》, 商務印書館; 1990 《王力文集・第十一卷》, 山東教育出版社

- ・魏倍泉 1990 《漢魏南北朝称代詞研究》(国立台湾大学博士論文)
- ・徐傑・李英哲 1993 〈焦点与兩個非線性語法範疇：“否定”“疑問”〉《中国語文》1993 年第 2 期(総第 233 期)
- ・楊伯峻・何樂士 1992 《古漢語語法及其發展》(語文出版社)
- ・周法高 1956 〈古漢語的語序和省略〉《大陸雜誌》十二卷七期・八期；《中国語文論叢》(正中書局, 1963 年)
- ・周法高 1959 《中国古代語法・称代編》；(中華書局, 1990 年)

(英文)

- ・Bodman, Nicholas, C. 1980, Proto-Chinese and Sino-Tibetan: Data Towards Establishing the Nature of Relationship, Frans van Coetsem and Linda R. Waugh eds, *Contribution to Historical Linguistics*, Leiden
- ・Meisterernst, Barbara 2001, The position of interrogatives in Han-time text, *Collected Essays in Ancient Chinese Grammar* (古漢語語法論文集), Edited by Redouane DJAMOURI, École des Hautes Études en Sciences Sociales, CRLAO, Paris
- ・Karlgren, B. 1926, *The Authenticity and Nature of Tso Chuan*, Goteborg.
- ・Peyraube, Alain 1997, On Word Order and Word Order Change in Pre-Archaic Chinese, 《中国境内語言暨語言学・第四輯》(中央研究院歷史語言研究所會議論文集之二)

[付記]

本稿は、下記の口頭発表の内容に基づきます。発表の際には多くの方々からご教示をいただきました。記して謝意を表します。

- ・「古漢語における二種の目的語倒置現象とその消失過程」(第四回アジアの風：2002 年 3 月 9 日：於東京都立大学)
- ・「古漢語における疑問代詞目的語倒置現象の消失過程——禪母系疑問代詞の場合——」(日本中国語学会・第 52 回全国大会：2002 年 10 月 27 日：於金沢大学)